

当財団では、産・学・官のネットワークづくりと情報交換の場を提供することを目的として、社会、経済から最新技術に至る幅広い分野の中から、時宜にかなったテーマを選定し、中部社研フォーラムを開催しております。

本レポートは、第280回（2016年4月20日）での講演「伊勢志摩サミットの成功へ向けて」を元にして、サミット終了後に伊勢志摩サミットの概要、ポストサミットの取り組みについて講演者である三重県雇用経済部伊勢志摩サミット推進局大橋範秀氏に執筆いただいたものです。

伊勢志摩サミットの概要、ポストサミットの取り組み

三重県雇用経済部伊勢志摩サミット推進局
次長 大橋 範秀



1. はじめに

まず、サミットというのは国の最高の国際会議です。国内外の注目は非常に高く、通常、我々公務員の課長級会議ではマスコミなんて見向きもされなかったのですが、課長級会議の部屋に入ったらテレビカメラが5、6台並んでおり、これまでに見たことのないような光景を目の当たりにしました。また、たぶん皆さまの中に伊勢志摩サミットって何だと、サミットサミットと言うけれど全然情報が来ないと感じている方がいらっしゃると思いますが、情報が来ない中には2つの理由があります。まず1つ、決まっているけど言えないこと。もう1つ本当に決まっていないこと。例えば、各国の政府団がお泊りになるホテルは決まっています。先遣隊が来ているのにホテルが決

まっていないわけがないので。でも先遣隊がいつでもどこで何を見たかは極秘事項です。それは決まっているけど言えないこと。本当に決まっていないことがディナーで使われる乾杯のお酒、メニューというのは、講演当時、私の知る範囲では決まっていませんでした。

本稿では、伊勢志摩サミットの取り組みということで、①伊勢志摩サミットとは、②我々三重県の取り組み、③ポストサミットに向けてについて述べさせていただきます。

2. 伊勢志摩サミットとは

サミットの歴史

サミットとは先進国の7カ国、8カ国そしてEUが一堂に会して開催される首脳会議です。残念ながらウクライナ情勢を受けて、ロシアの参加停止がありG7となっています。サミットは山の頂、頂上ということですが、頂上の議論をするということです。

昔は大きな会議室でやっていましたが、昨年7月、私は知事とサミットが開催されたイギリスのロック・アーンを見に行きましたが、レストランの1室をわざわざ半分仕切って、同時通訳ブースは首脳たちから見えなくして小さなテーブルで本当に首脳たちだけが膝を突き合わせて議論がされたとのことでした。

サミットは暦年で開催されており、昨年12月



写真1 サミット会場の賢島

(写真提供：一般財団法人伊勢志摩国立公園協会)



写真2 ワーキングランチの様子

まではサミットが決まり、三重県から情報発信されているだけで、国からは何も情報発信されませんでした。それは、12月まではドイツがホスト国をしていたからであり、サミットの情報発信は年を明けて、加速化されたのはそこに理由がありません。

サミットの変遷について、当初はニクソン・ショックだとか石油危機とか経済危機に対して先進国の首脳たちがどうするかということを経済論する場でしたが、冷戦の終結と共に話の内容がグローバル化の進展もあり、政治的な、民主化とか人権問題とか軍縮、最近で言えばテロ、気候変動とか幅広い議論がなされています。こういうところでサミットが変わってきた、変遷してきたわけです。例えば経済規模からするとG7は国際的なシェアが縮小してきています。当然、中国、インドと言ったBRICsの経済的な発展によって、G7の位置付けはかなり狭まったのではないかという議論が一部になされています。それは経済的な部分においてはそうなのかもしれません。でも例えばつい先日開かれましたG20の場所で本当に国際社会の、経済以外の話が膝を突き合わせてできますかというところは難しい部分があるはずで、そういう意味では経済的なG7の意味合いは薄れていると思いますが、非経済的な問題を議論する、国際社会をリードするということにおいて、このG7の位置付けは逆に高まっていると考えています。

過去のサミットがどういうところで開催されてきたかということですが、以前は首都を中心に、

日本で言えば東京を中心に行われていました。近年のサミットはリトリート方式、リトリートは直訳すると避難ということですが、日常生活を離れる場所、日常生活を離れるという意味がありますので、リゾート地であるとか都会とは違う、非日常のところに首脳たちが一堂に会するということが多くなっています。ドイツのエルマウもそうですし、イギリスのロック・アーンというのは湖のそばの高級リゾート地、ゴルフ場が併設された、そういうところで行われる。日本においても前回は北海道洞爺湖の山の上のリゾートホテル、その前は沖縄、その前3回は東京ということで場所も変遷してきています。

前々回の九州・沖縄サミットは、テーマについてそれほど変わっていません。「一層の繁栄」、「心の安寧」、「世界の安定」となっています。前回の北海道洞爺湖サミットにつきましては、「世界経済」、「環境・気候変動」、「開発・アフリカ」、「政治問題」がテーマになりました。また、開催地の主な取り組みということで、「開催支援」、「北海道発信」、「おもてなし」、「未来」が挙げられています。この4本柱は我々三重県民会議の4本柱とほぼ同じで参考としています。去年のゴールデンウィーク前にはサミットの開催地が決まるものと思っていましたが、決まったのは6月で開催まで1年もありませんでした。北海道の場合は1年前記念イベントができましたが、我々1年もない中でどうしようかということで既存のものを活用させていただきました。

伊勢志摩サミット

サミットの開催地が決定する過程についてどう決まってくるのかと思いましたが、誘致の時、2015年4月から現部署におり、誘致担当の仕事もしていましたが、6月5日のエルマウ・サミット出発前の羽田空港での安倍首相の発表の直前まで、鈴木知事も知りませんでした。鈴木知事も自信はあったが確信はなかったとのことでした。安倍総理は「日本の美しい自然、豊かな文化、伝統を世界のリーダーたちに肌で感じてもらえる、味わっ

ていただける場所にしたい。」、また、伊勢神宮について、「G7のリーダーたちに訪れていただき、伊勢神宮の壮厳で凛とした空気を共有できればよい。」と述べていましたが、伊勢神宮の訪問については、全ての参加国の首脳が参加する形で実現しました。

参加国の首脳が伊勢神宮を訪問するのはもちろん初めてのことでした。宇治橋前で各国首脳を一人ひとりお迎えし、最後にオバマ大統領を伴って安倍総理は2人で宇治橋を渡る。その後、横一列で和やかに談笑しながら歩く。そして、御正宮の前で歴史的な記念撮影をしました。その後、参集殿に戻ってきた首脳たちは、それぞれの思いを記帳しました。オバマ大統領は「幾世にもわたり、癒しと安寧をもたらしてきた神聖なこの地を訪れることができ、非常に光栄に思います。世界中の人々が平和に、理解しあって共生できるようお祈りいたします」と。伊勢神宮が「平和への祈り」、「自然と人との共生」、「他者や多様性への寛容や調和」、「日本の伝統文化の継続性を示す」などの場であることを各国首脳に感じていただきました。メルケル首相は、伊勢神宮訪問について「シンゾウありがとう。」とおっしゃったとも聞いています。安倍総理は、議長記者会見において「神宮は五穀豊穡を祈り、平和を祈り、人々の幸せを祈りながら2000年もの悠久の歴史を紡いできました。今日の平和と繁栄は、そうした人々の祈りの上に築かれたものであります。その神宮から、今年のG7サミットはスタートいたしました。」と述べ



写真3 伊勢神宮でのG7首脳の集合写真

ており、世界のトップがその場に勢ぞろいした姿そのものが、世界平和への強力なメッセージになったと思います。その後のオバマ大統領の広島への訪問と合わせ、それらは日本の、世界の歴史において「前向きな未来志向」という共通点を持つ大変意義深い神宮訪問になったのではないかと思います。

また、昭恵夫人も伊勢神宮への思い出が強く、配偶者プログラムにおいても、伊勢神宮を訪問いただきました。配偶者まで伊勢神宮に行かれるということは、三重県民にとって伊勢神宮を大切にさせていただくということは大変ありがたいお話しで、うれしい反面、その分三重県内の地域を回っていただく時間がなくなるということで少し残念な面でもありました。

伊勢志摩サミットではG7伊勢志摩首脳宣言が発出され、世界経済の下方リスク、国際秩序に対する一方的な行動による挑戦といった喫緊の課題に対し、「自由」、「民主主義」、「基本的人権の尊重」、「法の支配」といった普遍的価値に立脚したG7として、連携して国際社会の取り組みを主導していくことで一致しました。「質の高いインフラ投資」、「保健」、「女性」についても議論がなされ、質の高いインフラ投資の推進のためG7伊勢志摩原則、国際保健のためのG7伊勢志摩ビジョン、女性の能力開花のためのG7行動指針が示されました。

首脳たちはどうやって伊勢志摩に入ってくるのかについては、中部国際空港（以下、「セントレア」）から賢島へヘリで入られました。賢島には大型ヘリが発着できるヘリポートがないため、志摩スペイン村の駐車場に緊急ヘリポートを作り、対応が行われました。なお、イタリアのレンツィ首相とドイツのメルケル首相、フランスのオランド大統領については伊勢湾が厚い雲に覆われ、ヘリポート周辺も視界不良でヘリが使用できなかったため、陸路で伊勢志摩に移動することになりました。各首脳の車列を警備するため、伊勢湾岸自動車道や東名阪自動車道など、愛知県内から三重県内に向かう車線が一時、通行止めになりました。

サミットは首脳たちが会議をする、そうすると全国、全世界からメディアの方が多数来県される。想定国内外数千名という、桁違いのマスコミの方が押し寄せます（ちなみに広島外相会合は300人でした）ので、伊勢市にある県営サンアリーナ、延べ床面積10,000㎡以上ですが全然足りませんでした。そこで、仮設延床二階建てで8,000㎡の建物を追加して、延べ18,000㎡以上の施設を作りました。仮設のアネックスの中にはワーキングスペースだけでなく、政府の情報発信スペースとダイニングスペース、それと三重県の魅力を発信する三重情報館が設置されました。

伊勢志摩サミットと過去のサミットが違う点として、私がいつも言っていることなのですが、はじめての「普通の地方」で開催されるサミットであるということです。沖縄も北海道も地方ではないかとおっしゃる方もいらっしゃると思いますが、北海道と沖縄には国の特別の機関である開発庁がありまして、三桁国道について北海道と沖縄は国の直轄です。ですから首脳がお通りになる道を整備するのは国土交通省、国の予算でやりました。三重県がそれをやる場合にはそれは県の負担になる。これは大変な額になります。なぜ大変な額になるかという後ほど述べるとして、このために国、県、民間の役割分担をしっかりしつつも、連携して、三桁国道の整備についても、除草やガードレールの補修、安全・安心に行うための防犯カメラの設置とか一部国に補助とか交付金をいただき、外務省が初めて地方公共団体に補助金を出す、そういう制度を新設していただきました。今後普通の県がこういうサミットに手を挙げても、財政負担を軽くするような先例を付けられたのかなと思っています。

次に、これは愛知県に大変お世話になる、到着県と開催県が異なるという点です。三重県は空港を持っていませんので、セントレアに降りるとなると首脳はヘリもしくは車列、マスコミも一般公共交通機関などを使いますので歓迎とか警備とか重要になり、そこについては愛知県におんぶにだっこという状態でした。また、三重県は観光

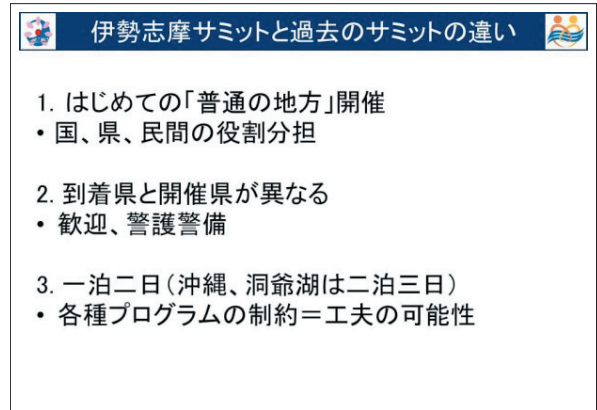


図1 過去のサミットとの違い

入り込み客数が多いのですが、実は大規模なホテルはそこまで多くありません。アウトリーチと呼ばれるG7以外の国の代表団は愛知県、名古屋市のご協力で名古屋市に泊まられると聞いています。それと同時に愛知県、岐阜県、名古屋市だけでなく、一般社団法人中部経済連合会（以下、「中経連」）にも大変力を入れていただいて、マスコミをターゲットにPRブース、インフォメーションセンターなどを設置していただいています。鈴木知事は、セントレアまで出迎えに行きたかったのですが、セントレアで出迎えて、各国首脳がヘリで飛び立つと航空管制がひかれますので、知事がヘリで飛べなくなる。そうするとホテルで迎えられないので、ここは全面的に愛知県知事をお願いすることになりました。

沖縄、北海道サミットは二泊三日でしたが、今回は、一泊二日となります。これは大きな違いで、ランチtoランチになります。朝一から首脳たちがいらっしゃるわけではないので、5月26日のランチから27日のランチまでの短い時間でやらなければならない。我々北海道の事例をかなり参考にしましたが、北海道では配偶者プログラムで、北海道のある市で配偶者の方に来ていただいてイベントをしましたというのを見て、我々はうらやましいと思いました。ランチtoランチで伊勢神宮に行かれたらそんなに三重県内は回れないだろうなど。ただ、逆に言えば、1カ所で複数の県民や複数のプログラムを溶け込ませる。そしてできるだけ多くの交流を生む、そういう中でできる工夫という

ことで鳥羽市にある御木本真珠島を訪問していた
 だき、海女との交流や地元の方々による太鼓の演
 奏や伊勢音頭を楽しみながら、日本文化への理解
 を深めていただくようなプログラムを行いました。
 今後、7、8年後開催される県の参考になればと
 思っています。

2. 三重県の取り組み

3つの成功要因

具体的に伊勢志摩サミット三重県民会議が何を
 しているかということで、伊勢志摩サミットの成
 功に向けて、知事は3つの成功要因を挙げていま
 す。まずは安全・安心な開催であること。安全・
 安心に行われれば、三重県、伊勢志摩という言葉
 がプラスとして発信されますが、何かあったらそ
 れは取り返しのつかないことになる。まずは安全・
 安心となることが最高のおもてなしとなります。
 警備は過去最大規模の2万3千人体制で行われま
 した。加えて、海上保安庁や自衛隊など多くの関
 係機関との連携が行われ、逮捕者もゼロという結
 果になり、日本の警察力を世界に示すことができ
 たのではないかと思います。また、ここには県民
 の皆さまの協力も欠かせませんでした。当日の首
 脳的車列実施などにおける交通規制など、ご不便
 もおかけした中でありましたが、多大なご協力を
 いただきました。中でも、官民で協力してテロな
 どを未然に防止するという試みは、まさに日本型
 テロ対策であり、これらは三重県でも今回のサミ
 ットの資産（レガシー）となるのではないかと思
 います。

次にできるだけ全県的な取り組みとして開催す
 るということです。開催されるのが賢島で、2カ
 所の橋を寸断すれば孤島になります。賢島で行わ
 れるのですが、できるだけ全県的に取り組みを行
 いたいということできざまな取り組みを行いま
 した。県民の皆さまのおもてなしは、首脳や配偶
 者からも感銘を受けたとの言葉をいただいたと聞
 いています。ある首脳は「おもてなしが日本の特
 徴だと知っていたが、それを証明するおもてなし



写真4 配偶者プログラムでの御木本真珠島訪問

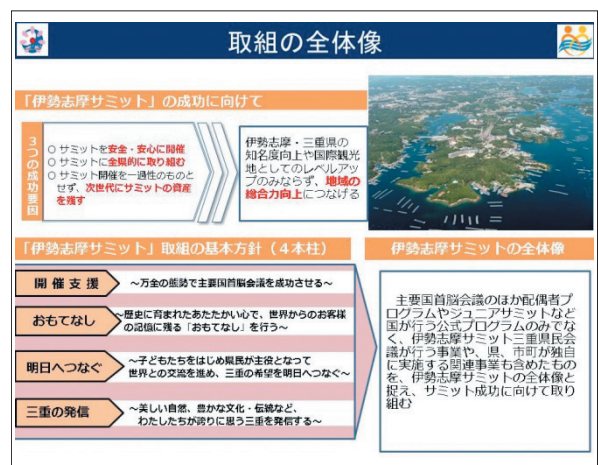


図2 三重県の取組の全体像



写真5 おもてなし大作戦のキックオフ

であった。」とおっしゃっていたそうです。国際
 メディアセンターのダイニングや三重情報館でも、
 国内外の方々から高い評価をいただきました。全
 市町で取組みされた「おもてなし大作戦」は6万
 人を超える方々がクリーンアップ活動にご参加い
 ただいたほか、合計11万本以上の花で歓迎して
 いただきました。これらオール三重での取り組みを
 通じて、三重県民の底力を改めて感じました。

3つめが次世代にサミットの資産（レガシー）



写真6 相可高校生が昼食を提供した配偶者プログラム

を残すことです。どのように子どもたち、若者にサミットというものを実感していただくか、なぜそれを目指すかということ、知名度のアップだけでなく、地域の方々に三重に誇りや自信を持っていただいて地方創生につなげていきたいと思っております。実際に次世代を担う若者の活躍は非常に感動するもので、ジュニア・サミット参加者をはじめ、配偶者プログラムで昼食を提供してくれた相可高校生、植樹や伊勢音頭などで交流してくれた小学生、外国語ボランティアとして活躍してくれた高校生など、紹介するとキリがありません。また、県内全域でその何十倍、何百倍もの子どもたちが、さまざまな形で参加してくれました。ある高校生は「三重の良さを再発見でき、海外で学びたいという自分の目標もはっきりした」と述べていました。彼らが経験したことや味わた達成感は、彼らの未来を選択する際に貴重な材料となっていくと思います。この例にとどまらず、そのような次世代がサミットを通じて育まれたことは、まさに今回のサミットの資産（レガシー）の重要なものの1つであり、三重県の財産になると思います。

取り組みの4本柱

3つの成功要因を達成するために4本柱、「開催支援」、「おもてなし」、「明日へつなぐ」、「三重の発信」で取り組んできました。伊勢志摩サミットの全体像というのは何も首脳会議、配偶者プログラム、ジュニア・サミットという公式プログラ

ムだけでなく、伊勢志摩サミット三重県民会議が行う事業も含めて、伊勢志摩サミットと位置付けています。後程口述しますが、4本柱についてそれぞれ事業を展開しました。

推進体制として二足のわらじと言っていたのは、伊勢志摩サミット三重県民会議で兼務および併任の職員を加えると直前には100名体制になりました。県民会議100名の他にも国への応援ということで数十名応援に出しました。小さい三重県にとってはかなりの負担で、この間も行政サービスを低下させるわけにはいきませんので、我々100名体制でしたが、県職員全体でサミットを支えると思って取り組みました。県民会議の中では、国、地元の市町だけではなく、三重県の関係する企業から職員を派遣していただきました。官民の役割分担で事業を構成しておりますが、我々の予算と我々の人員でやれることは限られており、企業団体が自ら主体となって行う事業を応援事業として募集しました。簡単に言えば伊勢志摩サミット記念フェアを商工会議所がやっていただく、市町の商店街がやっていただく、店舗にサミットの応援メッセージ、ポスターを貼っていただきました。協賛事業というのは我々がやる伊勢志摩サミット三重県民会議の事業に直接物であるとか役務、人を出していただくことを指しています。これら全体が伊勢志摩サミットの取り組みです。

広域での取り組みということでは、中経連、愛知県、名古屋市、岐阜県などで立ち上げた伊勢志摩サミット東海会議もあります。伊勢志摩サミット東海会議には大変お世話になり、セントレアや名古屋駅にカウントダウンボード、歓迎のためにブース出展も行いました。そのときに、我々は三重県、伊勢志摩サミットのPRというよりも東海地域のものづくり、ものづくりについて日本で一番の東海地域のPRができればと関係者と準備を進めました。それとともに広域連携ということでもう1点あります。実はサミットというのは当然、5月26日、27日の首脳会議を核とするのですが、その関係する閣僚会合というものが全国10都市で開催されます。これは過去国内最多です。神戸市

が中心となり関西で意見交換をしようという流れがあったので、我々三重県が音頭をとって伊勢志摩サミット・関係閣僚会合開催自治体連絡会議を開催しました。過去のサミットでは開かれなかった連絡会議では、規模もテーマも違うのに何ができるのかということで、一緒に情報発信しようよと、例えば広島外相会合でも他県市の会議・会合のPRをしましょうと。また三重県がイオンリテールとやる全国9ブロックで開催されるみえ伊勢志摩フェアで、10都市のPRを一緒に行いました。またおもてなしや情報発信で情報交換をすると規模の大小もありますが、そういう手があるのかとか、そういう仕掛けもあるのかと情報交換も行っています。こういう広域的な連携ができたのも、7、8年後の日本のどこかでのサミットへのいい先例ができたのかなと思っています。

開催支援

4本柱の一つひとつを簡単に説明していきますと、「開催支援」の一番は安全・安心です。全国で1万人規模の方に応援に入ってくださいますが、テロ対策はそれだけでは難しい部分があるので、パートナーシップということで地域を巻き込んで何かいつもと違う、知らない人がいるなとかわかるのは応援で来た他県の警察官ではなくて、地域の住民ですので、その住民が全て目になっていただいて安全・安心を守ってほしいと思っています。

ここで重要なのが鉄道、バス、電気、ガス、通信です。ちょっと停電しました、ちょっとWi-Fiつながりません、ちょっと携帯途切れましたということは絶対に許されないことですので、インフラ関係の企業におきましてはすごい努力をいただいで、万全の体制でとっていただきました。そして、全国初のドローン規制条例です。ドローンというのは農業や観光などととても有用なものです。市販の子どもが遊べるようなものでも1.5キロ飛べる性能ですので、我々賢島から1.5キロの半径は条例で飛行禁止にしています。なお、国土交通省は航空法の規定で賢島周辺半径46キロを飛行制限区域にしています。航空法でドローンは

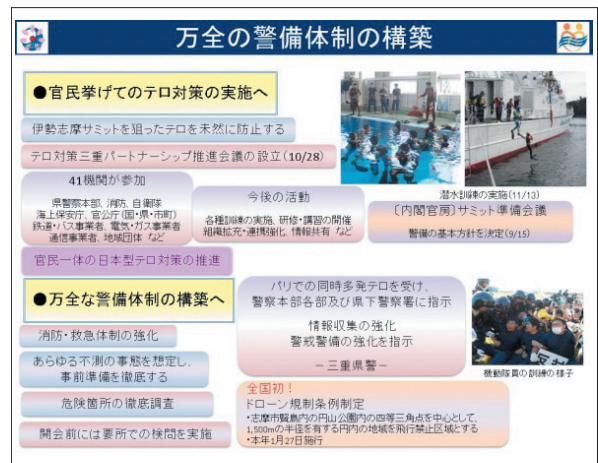


図3 安全・安心に向けた取り組み

規制できませんので我々は条例で規制をしています。

先ほどの警備だけではなく、消防、保安です。ガスとか火薬とかの点検が重要になってきます。また、保健・医療については食品衛生対策。5月の末は食中毒が怖い、また水道について水道管はつながっているのも悪さをすれば大変なことになる。通常の感染症対策以外にも関係機関にはご協力をいただきました。

パリやベルギーでテロがあったため、住民の方も不安になります。決まっているけれども言えない情報もたくさんあり、地元4市町で3回に分けて我々が住民懇話会で丁寧に説明させていただきました。それだけではなく、商工会議所や各種団体からサミットについて話してくれという話を受けましたら、私たちはどこにでも規模の大小かわかわらず飛んでいきました。我々としてはこういう機会をいただくことは本当にありがたい話でしたので、感謝を申し上げてできる限り説明にあがりました。

宿泊予約センターについては、サミットの関係ではセンターを通じて延べ約37万7千人が宿泊されました。勝手に予約してくださいでは、どこに泊まればいいのかということになるので、我々がJTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行に委託し、委託といってもお金は払っておらず、手数料をもらってくださいという形で運営を行いました。

次にお弁当についても約33万食が提供されまし

た。朝、昼、夜、警備の方はお弁当を食べますので、地元業者には残念ながら、ローソンを代表とするグループとセブン・イレブンを代表とするグループが入札で決まりました。なぜかという、5月の下旬、警察の方は配られてすぐに食べない、足下に置くことになります。安全な弁当については高度な殺菌処理が必要となります。それに加えて配らなければいけない。配って食べ終わって足元に置いておくわけにはいかない。回収までできるということが求められますので、結果大手のコンビニエンスストアが事業者となりました。でも、それでは地元が納得しないということで小規模な需要があれば、そこで業者をマッチングして100食単位でつなげるということではできるということで志摩市の商工会が中心となり、市内の16の弁当製造業者による会（志摩市弁当協力会）を自主的に組織し、サミット関係者に対して地元食材を活用した弁当を供給した事例もあります。

次にプレスの来県時の移動支援、セントレアからなぎさまちまでエアポートラインを増便して、その時間に合わせて、シャトルバスを運行しました。なぜそんなにまでしたのかとお思いになる方もいると思います。プレスの方が名古屋駅で乗り換えに不便だと思われて、三重県、中部は不便だったとこのプレスにどう書かれるかを我々はコントロールできませんし、書かれた事実すらわからない。そうならば、ここはお金かけても丁寧にお送りしようということ。海外のプレスへの対応はやってもやりすぎではないと思って取り組みました。

次に社会資本整備です。主に道路整備ですが、道路整備も大変で、ルートが発表されなかったため、通るであろう道路（30路線）・河川（37河川）・港湾（4港湾）の整備を行いました。

皆さま、サミット開催直前にはいろんなところで交通規制しますという表示を三重県内では目にしたと思いますが、もしヘリが飛ばなかったら、セントレアから賢島まで高速道路は全部止めます。そしてそこに入る新名神、西名阪も止めるとなると大変なことになる。そうならないように総量規



写真7 ワーキングディナーの様子

制を行いました。できるだけ公共交通機関を利用して、県職員であれば不要不急な会議、出張は自粛しましょうということで、伊勢志摩地区の県立高校など23校が休校になりました。21日から28日まで鉄道は鶴方駅から賢島駅までは運休してシャトルバスでの移動となりました。また、賢島に行く渡船を停止しました。

ネガティブな話が多かったですが、我々はこの機会をとらえて、三重県のいろんなPRをするために記念植樹をしたり、配偶者プログラムをしたり三重の文化を発信したり、県産食材、県産品、伝統工芸品をぜひ使ってくださいというふうをお願いしていました。この場合、ライバルは46都道府県でした。三重県でやるから三重県の食材、三重県の酒が使われるということは楽観過ぎます。実際、北海道洞爺湖サミットの晩さんの乾杯に使われたお酒は静岡のお酒でした。伊勢志摩サミットでは外務省の事務方は三重のお酒をと言っており、実際に伊勢志摩サミットでの首脳の食事の際の乾杯は全て三重県の酒蔵から提供された地酒で行われました。首脳の食事の乾杯に使用された日本酒については、問い合わせが殺到し、1日で1年分の注文があり、完売状態となっています。食材や調度品についても、1品でも多く県産材や県産品を使っていただけるよう国などに働きかけを行った結果、首脳や配偶者のランチやディナーには、伊勢えび、松阪牛、伊賀牛などの少なくとも269品の三重県産の食材を生かした料理が提供され、国際メディアセンターで国内外の報道



写真8 第3回伊勢志摩サミットフォーラム

関係者に提供された食事においても、156種類のメニューのうち、152種類に三重県産食材が含まれており、ほぼ全てのメニューに三重県の食材が使用され、三重県の食の魅力を最大限にアピールすることができました。その他、乾杯で使用された萬古焼、尾鷲ヒノキの会議用テーブルなど、42品の県産品が使用されました。

おもてなし

次に「おもてなし」ですが、いろんなところで200日、150日、100日、50日前とイベントをやっています。伊勢志摩サミットフォーラムも第1回は志摩市で、第2回は鈴鹿市で、第3回は津市でやり、平井堅さんが公認サポーターですので「TIME」というサポーターソングのデモ音源を発表していただきました。おもてなしで県民の方がどれだけかかわれるかということで外国語ボランティアを募集しました。300人と書いてあり



写真9 2016年ジュニア・サミットin三重の様子

(写真提供：2016年ジュニア・サミットin三重)

ますが、当初は200名だったのですが、1,000名も応募が来ましたのでこれはもったいないということで300名に採用を増やし、277名の方にご活躍いただきました。

また、全国に544カ所にカウントダウンボードを配布し、内閣官房にも置いていただきました。ありがたいことに寄附金が5億2,566万282円と、我々当初3億円集まればいいなと考えていたがここまで集まった。協賛、応援事業については1,041件と1,000件を超えました。

次に「明日へつなぐ」です。ジュニア・サミットについて当たり前に三重県で開催されるわけではなく、ぜひということで誘致をしました。できれば、北勢地区でということで22日から桑名市の長島リゾートで開催されました。G7を代表する15歳から18歳の中高生が集まって、「次世代につなぐ地球～環境と持続可能な社会」ということで討議をしていただきました。日本代表は三重県内に住む高校生4人が選ばれました。三重県に1日くださいと言って、4コースに分かれて、討議に資する視察に加えて県内分散型体験・交流行事として、ジュニア・サミット参加者に北勢、中勢、南勢、伊賀地域を県内12市町を訪問していただき、各地で地元の方々による歓迎やおもてなしなどを行っていただき、伊勢志摩サミットの開催につながる全県的な取り組みを展開することができました。

また、せっかくサミットが開催されるということで、小、中、高で国際交流を勉強しましょうと企画したところ、90回の募集に対して、196回分の申込みがありました。外務省も「イチからわかる！サミット塾」ということで、29校で開催していただきました。これらがあまりに評判がよかったので、今年度サミットが終わってからも国際理解・国際交流プログラムを行っています。

そして、サミットを一過性にしないためにも記念館を作ろうと思っています。サミット開催1年後までの適切な時期に設置をしたいと考えています。展示内容については映像とか音とか動的なものを盛り込み、会議場のテーブルなども展示する

と思います。

また、三重県が次世代グローバル人材育成の地、メッカになることを目指して、8月31日から9月3日にかけてサミットに関するテーマについて県内外の学生や留学生100名で討議する、大学生版のサミット「2016大学生国際会議 in 三重」を行います。三重県を通じて、日本を知っていただく、日本、地域の抱える課題とか可能性を知ったうえで世界を見るというグローバル人材の育成に力を入れていきたい。これは29年度以降も場所、テーマを変えてやっていきたいと考えています。

三重の発信

「三重の発信」については、国際メディアセンターに三重情報館を設置し、「伝統と革新～‘和’の精神」をテーマに、伝統工芸の実演や体験、海女の講話、忍者ショーなどを行うとともに、県内企業の高い技術力が生んだ製品を展示し、伊勢茶や餅菓子を振る舞うなど、三重の魅力を総合的に発信しました。三重情報館には、5日間で延べ1万2,729人の報道関係者の方に来場いただき、大変好評でした。

海外プレスも多く三重に来ていただきました。海外プレスツアーをこれまで22回行い、36カ国(地域)のプレスに来ていただいています。BBCとかニューヨークタイムズとかニューズウィーク、フィナンシャルタイムズへの情報発信を行っています。海外プレスツアーを行ったことで実際に三重の食材がビジネスにつながったという実績も出



写真10 三重情報館での忍者ショーの様子



写真11 伊勢志摩サミット三重県民会議シンボルマークの発表

てきています。

県民会議のシンボルマークは、北勢きさら学園在校時に北海道洞爺湖サミットのロゴマークに公募で採用された近藤敦也さんに頼んだシンボルマークです。伊勢志摩サミット三重県民会議のシンボルマークは公募しませんでした。この時期はオリンピックのエンブレムとかで公平性、透明性が言われる中であえて公平性、透明性よりも意思を打ち出そうと、それが伊勢志摩サミット三重県民会議ということで行政じゃないことからできたことです。障害を抱えながらも社会に出てもおかつデザインの仕事をしていた近藤さんに知事が直談判で作成をお願いしました。最終的には3つの案から県民投票をしましたがそういう意思を持ってシンボルマークを作りました。

3. ポストサミットに向けて

ポストサミットに向けて、サミット開催における効果ということで直接効果は三重県で480億円、パブリシティ効果は首都圏の主要紙だけで440億円。まだ中間試算で今後増えていくと思います。いろんな民間シンクタンクさんが数字を出していますが、ありがたい数字ですので、それに近づけるように努力をしていきたいと思っています。

サミットが決定してから外国人の宿泊者数の伸び率が全国1位を記録しています。そして、注目されそうな都道府県第2位とかニューヨークタイ

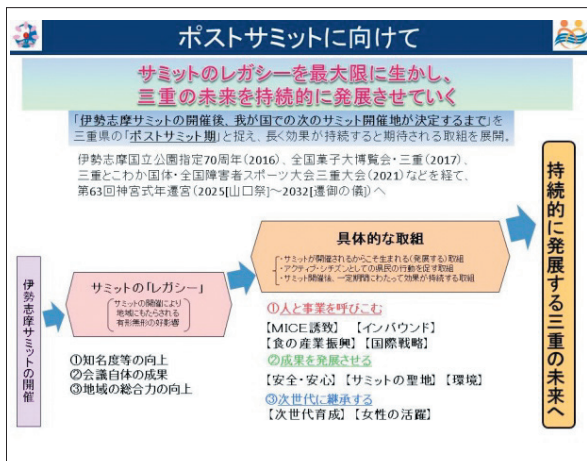


図4 ポストサミットに向けて

ムズ紙の2016年に訪れるべき52の場所で選ばれるとかかなりメディアの露出が増えています。知事への取材も増えており、サミット開催決定前1年で20件だったものがサミット決定後1年で127件と約6倍に増えました。

三重テラスという首都圏発信拠点では売り上げが30%伸びて、今も伸び続けています。これはサミットが決定してからではないですが、アマンリゾートが伊勢志摩に日本で2番目となる超高級ホテルをオープンさせました。サミットの会場となる志摩観光ホテルも6月7日にリニューアルオープンしました。

サミットを契機とした取り組みを通じて、多くの県民の皆さんが自分たちのふるさとの魅力に改めて気づき、愛着や誇りを持たせたことが、サミットの最大の資産(レガシー)と言えるのではないかと思います。このことは地域住民が地域をより良くしていこうという動機付けとなり、そのための具体的な行動が活発化して、自立のかつ持続的に発展する契機となります。

しかし、サミットの開催は、あくまでチャンスに過ぎません。県はもとより、県民の皆さん一人ひとりが、このチャンスをつかもうとする思いを持ち、そのための行動を起こし、サミットの資産(レガシー)を次世代に継承していく必要があります。そのことにより初めて、中長期的な視点からも伊勢志摩サミットは大成功だったと、後世において永く語り継がれることになると思います。

サミットを経て、今、三重県は新たなスタート地点に立ったところです。ポストサミット事業に全力で取り組んでいきますので、引き続き、皆さんのご支援とご協力をお願いします。